

Ⅲ 実践

1 ネットワークシステムを構築する

(1) 町立図書館と学校図書館との連携

学校図書館連絡会議での協議と町立図書館の工夫により、連携を図るために次のような取組を行った。

ア WEB上からの予約受付

町立図書館では、子どもたちや教職員が必要としている本を学校で検索し、貸し出しの予約をすることができるように、WEB上での貸し出し予約を実施している。予約の上限は1校当たり図書200冊、紙芝居20セットである。緊急に資料が必要な場合は、先に電話連絡をすれば迅速に対応することも可能である。また、書棚にある本の取り置き（在架予約）も行っている。

イ 町立図書館から学校への貸し出し・返却のシステム（物流）

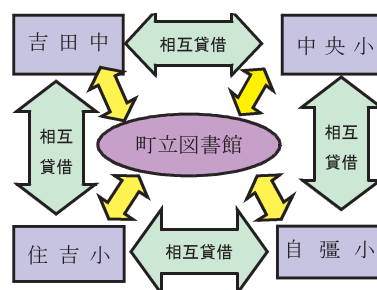
町立図書館では、各学校を巡回して団体貸し出しの本を運搬するサービスを行っている。毎週3回水・木・金の午後1時から2時頃に、町立図書館の職員が要請に応じて町内の四つの小中学校を回っている。貸し出し数は、図書200冊以内、紙芝居20セット以内、貸し出し期間は、2か月以内である。返却は各学校で直接町立図書館に持っていか、貸し出しの巡回に立ち寄る町立図書館職員に手渡す等して、確認を得るようにしている。

学校図書館を活用した授業研究が進むにつれて、このシステムの利用率は高くなり、大量の本が動くようになった。しかし、この成果の一方で、町立図書館の司書からは次のような問題点が出されている。

- ・団体貸し出しが十分にできるだけだけの資料がない。団体貸し出しで大量に貸し出してしまうと、個人で調べ学習に来た子どもが借りるものがなくなってしまう。
- ・貸し出し冊数が一律でよいのか。各校で児童生徒数に差があり、大規模校では200冊では足りないことがある。

ウ 学校図書館への支援（資料7）

町立図書館では司書教諭や学校司書から寄せられる「選定した本以外に何か使える資料はないか」「こういう授業をしたいけれど、何か参考になる資料はないか」



学校間連携システム



本の受け渡し

などといった質問に、細やかに対応するように努めている。また、町内の小中学校で作成した総合学習のテーマ一覧表に応じた資料の確保や蔵書管理、図書の購入にも努めている。この他にも、町立図書館を訪れた子どもたちに対して、各学年に応じた町立図書館の利用ガイダンスを行ったり、調べ学習の指導を行ったりしている。また、町立図書館に行くことができない子どもたちに対して、学校図書館を経由して貸し出しを行うサービスも実施している。

(2) 学校間相互貸借システム

吉田町では、町立図書館との連携だけではなく学校間でも本を分担収集して蔵書の共有化を図り、相互に貸し出しができるように、次のようなシステムを整えた。

ア 学校図書館全体計画の検討 (資料8)

共有化にあたっては、まず吉田町の研究構想の下に各校の学校図書館の目標や方向性を明確にすることが大切である。そこで、学校図書館連絡会議では、各校で吉田町の研究構想に基づいた学校図書館全体計画を作成することにした。また、作成した計画を持ち寄り、学校図書館連絡会議で吟味することにした。

これにより、学校図書館の活動の目標と育てたい力が、学校ごと学年ごとに明確になり、共有化や授業実践に役立った。

イ 本の分担収集 (資料9)

総合的な学習の時間には多領域にわたって調べ学習用の本が多数必要である。しかし、各学校で購入できる本の数は限られている。そこで、総合的な学習の時間で使うことの多い「郷土資料」「環境」「国際理解」「福祉」の4分野について、4校で分野ごとの担当を決めて収集し、学校間で貸借を行うこととした。

学校間で本を円滑に貸借するために、各校の総合的な学習の時間の年間計画を学校図書館連絡会議でつき合わせ、学期ごとに調整に努めている。総合的な学習の時間の題材は、季節や教科学習の進捗とも関連しているので、調整が難しいこともある。

ウ 貸借の方法

貸借は、学校の要請に応じて町立図書館の巡回車により職員が行う。急ぐ場合は、学校司書が直接出かけて貸借を行っている。

(3) 小・中学校テーマ別蔵書リストの作成

4校の所蔵データがパソコンでつながれていないので、学校間で蔵書の検索ができない。そこで、学校司書がFAXで資料一覧表を送ったり、テーマ別蔵書リストを見て借りたい本を選んでいる。小・中学校間の蔵書の共有にあたっては、どの学校にどんな資料があるかを把握していることが基本である。特に共有化を進めている4分野（郷土資料・環境・国際理解・福祉）については、テーマ別にリストを作

成し、各学校で他校の所蔵データを所有する必要がある。そこで蔵書点検を行い、所蔵データを確実なものにした。

手順は、各学校の司書の下、町から派遣された作業員が蔵書点検を行い、不明資料の検索や廃棄対象資料の抜き出しも行った。未登録資料は司書が所蔵登録をした。所蔵データを完全なものにした後、各校で4分野別にリストを作成し、4校分を一つにまとめて各校に配布した。このリストは学期毎に更新している。

このリスト作成は手作業で行うため、非常に手間が掛かってしまうのが欠点である。そのため将来は、学校間の全てのデータを共有し、いつでもどんな資料でも瞬時に蔵書検索できるパソコンネットワークを構築できればと願っている。

2 研修をとおして職員の意識を高める

資源共有ネットワーク事業を推進していくためには、吉田町の教職員がその意義と活動内容を共通理解することが大切である。そこで、学校図書館連絡会議では、事業の意義や学校図書館の有効利用についての理解を深める職員研修を推進することとした。

(1) 職員の協力体制づくり

共通理解の第一歩は、司書教諭の働き掛けである。各校の会議や校内研修の場に、研究の進捗状況を伝えたり、職員の疑問や質問に答えたり、他校の実践の様子を紹介したりする時間を設け、職員の意識を高めることに努めた。

中央小学校では校内研修の組織に「資源共有ネットワーク委員会」を設置して、学校図書館を活用した授業づくりを推進している。各学年1～2名から成るこの委員会では、資源共有ネットワークを生かした授業の在り方を研究し、職員の意識を高めるための手立ても話し合われる。リーダーは司書教諭が務め、ここでの成果を内外に発信している。

(2) 外部講師を招いての職員研修

職員研修や意識調査のアンケートをとおして、学校図書館の利用度の高さや役割の大きさが職員にも認識されてきたが、研究が進むにつれて、様々な疑問点や問題点も浮かび上がってきた。そこで、外部講師を招き、様々な情報を収集して、問題の解決に当たりたいと考えた。

「はてな？発見術を会得しよう」

吉田中学校では、講師による学校図書館を利用した模範授業が行われ、子どもと教職員とが調べ学習の仕方を学んだ。講師の小畑信夫氏は、「何かを調べたい」という意欲はふだんの生活の中で生まれてくる些細な疑問がきっかけになると、疑問をもつことの大切さを子どもたちに説いた。また、疑問を調べ学習につなげていく方法についても例を挙げながら詳しく説明した。

「調べ学習の指導法」

中央小学校では、講師に現役の司書教諭として研究を進めている塩谷京子教諭を招き、調べてまとめる学習についての指導法を学んだ。塩谷教諭は学年・発達段階に応じた「付けたい力」を明らかにして、学年に応じた「調べまとめる力」を積み上げていくことの大切さを説いた。また、そのような力を身に付けさせるために、司書教諭や学級担任は何をなすべきかを、長年の実践と研究をもとに説明した。

「生きる力をはぐくむ学校図書館」

住吉小学校と自彊小学校では、講師に県総合教育センターの石田直美指導主事を招き、学校図書館の在り方を学んだ。石田指導主事は、学校図書館を巡る最近の動向や学校内外の協力体制づくり、学校図書館を活用した学習や読書活動の推進の仕方等について、豊富なデータをもとに解説した。教職員は、学校体制・町ぐるみの体制で活動を推進することの重要性を再認識した。

3 ネットワークを活用した授業を研究する

(1) ネットワークを活用した授業の進め方 (資料10、11)

授業を進める上で大切なことは、子どもたちの「知りたい」「調べてみたい」「やってみよう」という意欲を喚起することである。それにはまず、一人一人の追究を支えていくための教材や資料が用意されていることが必要である。しかし、私たちが学校図書館を活用した授業を進める上でもっとも悩むのが、学校の蔵書だけでは子どもたちに十分に資料を提供できないということである。

そこで、ネットワークを活用して「早く」「たくさん」「その子に合った」資料を入手し、授業を効果的に進めたいと考えた。

中央小学校では次のような手順で授業を進めた。

ア 資源共有ネットワーク委員会で授業の構想や手順を研究する

授業者が委員会で構想を話し、委員会のメンバーがともに情報収集・事前研究を進める。また、司書教諭・学校司書も町立図書館や学校間貸借の準備を進める。

イ 資源共有ネットワークシステムを活用し、資料を入手する

授業が始まり、子どもたちが必要としている資料が確定すると、授業者は学校司書と司書教諭に連絡する。学校司書は、町立図書館に行つて必要な資料を借りたり、町立図書館の蔵書を検索しWEB予約を行ったりする。また、学校間の相互貸借を活用するために他校にファックスや電話を入れる。すると、資料が前述の物流ネットワークで送られてくる。急ぐ場合には、学校司書や司書教諭が直接他校に出向いて本を探

すこともある。なお、校内で子どもたちが本を探す場合には、学校司書が相談に乗っている。

ウ 授業研究をして、子どものあられや指導法を検証する

校内研修の一環として、学校図書館を活用した授業研究を行い、教職員、司書教諭、学校司書が一同に会して指導の在り方を探る。その際には、近隣の学校にも案内を出し、学校図書館及びネットワークを活用した授業の在り方を広めていく。

エ 資料の記録をする

授業で子どもたちが使用した資料は担任が記録しておき、他の学級や学校が実践する際の参考となるように保管する。また、資料を使って子どもたちの学習の様子を作品や写真等の形に表し、町内の学校に広めていく。

(2) 小学校の実践 (資料12)

ア 授業の内容

中央小学校3年D組(児童数38人) 国語 17時間扱い

指導者 学級担任 3年級外職員 学校司書

単元名「生き物のひみつをみつけて、みんなにつたえよう」

- ねらい
- ・生き物のひみつ(不思議な力、身の守り方、特別な体の仕組み)に興味を持ち、進んで調べたり表現したりする。
 - ・めだかの身の守り方や体の仕組みについて、大事なことを落とさずに読み取ることができる。
 - ・生き物のひみつについて、自分で題材を選び資料を使ってまとめ、「生き物のひみつ新聞」をつくることができる。

付けたい情報活用能力

- ・子どもが主体的に課題に合った情報を見つけ、まとめる。
- ・調べたことを自分なりの言葉や表現方法で表す。

イ 子どものあられ

「ほしい資料が見つかった！」

ネットワークシステムの活用により、子どもたちは自分の課題解決に必要な資料をすぐに豊富に入手することができた。この授業実践で子どもたちに貸し出しされた資料は合計300冊にも上る。



「調べ方が分かったよ！」

子どもたちは資料の中の必要な情報に付箋を貼る、難しいところは声を出して読むなどの方法を教わり、内容を確実に理解できるようになった。中には索引を活用して調べる子も出てきた。



「八木先生（司書）教えて！」

子どもたちは学校司書の八木先生を頼りにしている。資料の相談や調べ方についての質問など、どんどん話し掛けてくる。子どもたちの意欲に応じて、八木先生も資料集めや支援に時間を忘れて取り組んだ。



「新聞にまとめたよ！」

必要な情報を選び取り、まとめていく活動は難しい。しかし、教師がまとめ方の様々なサンプルを提示したことにより、子どもたちは意欲的に作成に取り組んだ。完成した「生き物のひみつ新聞」は他校にも配付し、実践の様子を伝えた。



「たくさんの先生方がいらっしやっったよ！」

ネットワークを活用した授業の効果を内外に発信するために、近隣の教員・司書の皆さんに授業を参観していただき、意見を伺った。子どもたちは大勢の人たちに囲まれての調べ学習となったが、集中は途切れることはなかった。



「ひしめき合う図書室」

中央小学校は学級数27の大規模校。学校図書館の利用が活発になればなるほど、施設が手狭になり、資料も貸し出しに関わる人手も足りなくなる。これをどう調整していくか。司書教諭は、校内資源共有ネットワーク委員会に相談を掛けている。

(3) 中学校の実践 (資料13)

ア 授業の内容

吉田中学校1年生(9クラス 285人) 総合的な学習の時間・10時間扱い

指導者 1年職員 12人 司書教諭 学校司書

テーマ 「現在の私と吉田の歴史・文化をつなごう」

- ねらい
- ・古代から現代につながる吉田の歴史・文化の概要を知り、グループごとに追究し、資料としてまとめていく。また、自分たちが作った資料をお互いに見せ合う活動をとおして、吉田の歴史・文化を縦のつながりでもとらえ、そこに連なる自分に気付く。
 - ・グループで課題を設定して追究し、小学生でも分かるようにまとめていく取り組みをとおして、教科の学習を生かした学びを実践する。

付けたい情報活用能力

- ・難しい言葉を理解し、手に入れた情報を分かりやすい言葉や文章に書き換える。
- ・読み手(小学5、6年生)を意識して、相手に適した表現を工夫する。

イ 生徒のあらわれ

「まず授業者が本を知る」

各テーマグループの授業者は、授業前に図書館に出向いて本を調べた。そしてグループのテーマに応じた本を選び、使いやすい本を紹介したり、情報が探し出せない生徒に助言したりした。



「本の配置を工夫して、使いやすく」

本は生徒が使いやすいように配置した。追究テーマに関わる本は各教室に、全体に関わる本はブックトラックに載せて廊下に配置した。ブックトラックには、司書教諭と学校司書が就いて、生徒の質問を受けたりアドバイスをしたりした。

生徒は配置ごとにまとめられた資料のリストを見て、自分で必要な本の場所を確認してから資料を探しに行った。



「小学生にも分かる言葉に書き換えよう」

生徒たちが使う資料はネットワークを利用して町立図書館や小学校から収集し、200冊近く準備した。また、使いやすい部分はコピーをして、全員の手渡るようにした。生徒は豊富な資料に接して、調査学習への意欲、追究力を高め、必要な情報を探し出そうとしていた。また、意味の分かりにくい言葉を書き換えたり絵や図で表したりして、小学生にも分かりやすいように工夫していた。



「小学生にも活用してもらいたい」

生徒が作成した資料はカラーコピーを撮り、テーマごとにファイルにまとめた。また、インデックスを付けて調べやすくし、町内の3小学校と町立図書館へ送った。郷土資料は数も少なく、記述も難しい。そのため、「自分たちの作った資料が少しでも小学生の調べ学習に役に立てば。」と、生徒たちも意気込んで作成した。



ネットワークを活用した授業実践で共通する成果は、ネットワークにより豊富な資料が集められ、子どもたちの学習意欲や情報活用能力が高められたこと、授業者と学校司書、司書教諭の連携した指導が進められたことである。

4 読書指導の方法を工夫する

町内各校では授業実践と並行して、読書意欲を高め、図書館の利用の仕方を身に付ける指導について工夫して取り組んでいる。中央小学校を例にして、そのいくつかを紹介する。

(1) 学校図書館と出会うオリエンテーション

3年生になった子どもたちは、学校図書館で自分の利用カードを持ち、本を借りるのをとても楽しみにしている。そこで、4月の早い時期に司書教諭と学校司書が協力し、学級ごとに図書館との出会いの場となるオリエンテーションを行った。



司書教諭と学校司書は子どもたちに読み聞かせをした後で、図書館での約束や本の借り方、返し方、扱い方のきまり等の利用指導を行った。また、図書館の本には住所があり、いろいろな仲間に分けられていることも発達段階をおさえながら指導した。さらに学校司書の大変な労力のもとに個人の利用カードが作成されていること、どの教師も子どもたちに本好きになってもらいたいと願っていることなどを伝えた。子どもたちはオリエンテーションをとおして図書館に対しての期待を膨らめていった。

(2) 「本探しの旅に出よう」 (資料14)

「ほしい本がどこにあるか分からない」「もっと早く望む本を手にした」という子どもたちの声から、学級担任と司書教諭のチームティーチングによる「本探しの旅に出よう」の実践を行った。

資料にあるような手づくりプリントを6年の担任が用意し、学校図書館の本が十進分類法によって並べられていることを知らせた後、本を探す活動を行った。分類番号から本を探したり、本の題名から分類番号を見つけ考えたりする活動をどの子も興味をもって取り組むことができた。「伝記は2の分類だよね。」「理科の本は4だ。」「913は日本の作家の書いた本だ。」「環境の本はどの分類なんだろう。」などつぶやきながら、一生懸命に本を探す姿が見られた。

また、6年部の教師の「おすすめ本」のリストを渡し、その本が町内のどこの図書館にあるのかを子どもたちにも知らせた。ネットワークシステムにより、望む本が手

に入れられるということも合わせて伝えた。

(3) 「中央小子ども読書の日」

中央小学校では今年度は4月21日を「中央小子ども読書の日」と定め、学級担任による読み聞かせに全校で取り組んだ。担任は「子どもたちに楽しい本を」という思いから、自校の蔵書や他校、町立図書館のリストを調べ、ネットワークシステムを活用して本を集めた。職員室には集めた本を置くコーナーもできて、雰囲気も盛り上がってきた。学校司書と司書教諭、図書委員がポスターを作成したり昼の放送で呼び掛けたりして、さらに全校の読書への意識を高めた。

(4) 読書旬間から読書月間へ

中央小学校では11月の2週間を「読書旬間」として、図書委員会が中心となって全校での読書活動に取り組んだ。その中の「読書郵便」の活動は、友達にお勧め本を葉書で紹介するものである。子どもたちは、ペア学年の友達や親しい友達、先生などに葉書を書いて学校のポストに投函する。それを図書委員が集め、配達する。子どもたちは嬉しそうに葉書を読み、薦められた本を借りに行く子も見られたが、全体として大きな渦となるまでには至らなかった。

そこで、平成18年度は読書旬間を読書月間とし、期間を長くして活動を継続していくことにした。6月の「読書月間」では、1、2年生は「親子読書」に取り組み、3年生以上は読書記録を付けることにより自分の読書を振り返る活動に取り組んだ。

この他にも、ブックトークやアニメーションなどの取り組みを少しずつではあるが盛り込んでいる。

こうした取り組みの積み重ねや授業実践等により、子どもたちの読書意欲は確実に高められている。中央小学校学校図書館の平成18年6月の本の貸し出し数は3,000冊にも及んだ。

5 学校図書館の運営方法を工夫する (資料15)

子どもたちが目を輝かせて足を運ぶ学校図書館の運営を目指し、各学校では様々な工夫をしている。住吉小学校の例をいくつか紹介する。

(1) 図書委員会新聞で情報交換

吉田町4校の図書委員会では活動内容を「新聞」の形に表し、各校に送っている。この新聞の交換と掲示により、図書委員会の子供たちは「こんな活動をするとうみんなが学校図書館へ来てくれるんだ。」とか、「〇〇学校の学校図書館利用の様子はこうなんだ。」という情報を得ることができ、委員会活動の活性化につながった。

また、図書室を訪れる子どもたちも新聞を見て「〇〇学校でよく読まれている本を

私も読んでみよう。」「〇〇学校の先生お薦めの本を読んでみよう。」というように、読書への意欲を高めることができた。

「図書委員会新聞」は毎月行われる学校図書館連絡会議でも話題になり、司書教諭や学校司書の指導の参考になった。

(2) 「先生方のお薦めの本」コーナーの設置

住吉小学校では、子どもの読書領域を広げるため、教職員の「お薦めの本」のコーナーを設置した。教職員の薦める本を実際に図書室に置き、子どもたちが手に取って本を見ることができるよう、本の置き方やコメントの掲示などを工夫した。本は、住吉小学校にないものもあったので、ネットワークを利用して町立図書館や他校から取り寄せ、「お薦め本」のすべてを展示することができた。



住吉小学校

「先生方のお薦めの本」コーナー

親しみのある教職員のお薦めの本とあって、本を手に取り開いてみる子や借りていく子が数多くみられた。子どもが借りて書架になくなった本は、表紙のカラーコピーを掲示し、子どもたちの読書意欲が途切れないようにした。



町内校長先生方のお薦めの本コーナー

町内4校の校長の薦める本をコメントとともに展示した。薦める本は小・中学生向けのものでコメントには薦める理由も書いてもらった。「校長先生方のお薦める本」とあって、子どもたちは興味深そうに本を手にとっていった。

(3) 「同じ作者の本」のコーナーの設置

住吉小学校では、国語の教科書（教育出版）の文学教材の学習に合わせて、読書への興味・関心を高めるために、「教材と同じ作者の本」コーナーを設置した。

3年生を例にあげると、『消しゴムころりん』の作者岡田淳の作品は、住吉小学校の蔵書では『こそあど森の物語』をはじめ15冊しかない。そこで、町立図書館から8冊借り受け、23冊の本を集めることができた。

本を手にした子どもたちは、「教科書のお話と同じ場面が出てきた。」「加藤多一さんは、つりが好きなのかな？」など、教科書教材で学習した作品と比べながら楽しく読んでいた。なお住吉小学校では、このコーナーの設置のために、町立図書館より35冊、吉田中学校から3冊借り受けた。他の2校の小学校にも子どもの希望があれば貸し出しができるように協力を依頼した。

この取組は、ネットワークシステムが機能して実現したものであるが、次のような問題点も浮かび上がっている。

- ・町内3小学校とも借りたい時期が重なることが多い。連絡を密に取り合って時期を調整していく必要がある。
- ・コーナーの設置だけでは関心を示さない子がいる。担任が読み聞かせをするなど、子どもたちに本の紹介をする時間を設けることが大切である。

6 ボランティアの活動を工夫する

資源共有ネットワーク推進事業においては、ボランティアも大きな役割を担っている。特に読み聞かせでは、町内4校で年間130人ほどの方が活動に参加している。ボランティアの多くは保護者や地域住民で、忙しい仕事や家事の合間を縫っては学校に足を運び、熱心に活動に取り組んでいる。



(1) ボランティアによる読み聞かせ

吉田町の各小・中学校では、朝の活動時間に15分ほどの読書活動の時間を設定している。ボランティアによる読み聞かせは、その中の活動の一つとして位置づけられている。学校により組織や活動の仕方に若干の違いはあるが、概ね週1回の活動がどの学校でもスムーズに行われている。

子どもたちはボランティアが来るのを心待ちにしている、読み聞かせが始まると熱心に耳を傾け、本の世界に入り込んでいく。ボランティアの選書と語り口のよさが、子どもたちを引きつけているのであろう。

各校の読み聞かせボランティアの概要

学校名	実施曜日	ボランティア人数	開始年度	ボランティアの打合せ会
吉田中学校	木曜日	16人	平成13年	文書等による通知・連絡
住吉小学校	水曜日	30人	12年	年間1回
中央小学校	金曜日	59人	11年	年間4回
自彊小学校	木曜日	25人	14年	年間4回

(2) ボランティアのための読み聞かせ講座

吉田町教育委員会では、ボランティアの質の向上を目指して「読み聞かせ講座」を開催した。

第1回の講座では、読みのプロである元アナウンサーを講師に迎え、読み聞かせの考え方についての講義やテキストを使つての実習などを行った。第2回の講座では「子どもと本を結ぶ」をテーマに、読み聞かせのための選書についての講義を行った。各校の読み聞かせボランティアは熱心に受講



し、多くの収穫を得たようである。講座終了後の感想には、「学習したことを今後の読み聞かせに生かしていきたい。」「ボランティアの方の意欲や技能に刺激を受けた。」という声が多数寄せられた。

(3) ネットワークシステムを活用した読み聞かせ

自彊小学校では子どもたちの読書領域を広げるために、また物語のシリーズ本や同じ作家の本を読み進めることの楽しさを味わわせるために、意図的に選書しての読み聞かせを行った。ボランティアがどの学級でどの本を読むかという割り振りや読む本の配給は、学校司書が中心になって行った。本の調達は校内だけでは間に合わないこともあるので、ネットワークシステムを使い、町立図書館や他校から本を借り受けることも多かった。

こうした読み聞かせを進めていくにつれて、子どもたちは本の世界に引き込まれ、「早く先が読みたい」「もう一度自分で読んで味わいたい」と、図書室を訪れて本を借りていく子が増えてきた。

(4) ボランティアによる図書室の掲示

3小学校では、図書室の掲示にもボランティアが参加している。子どもたちが図書館に足を運びたくなるような季節感あふれる美しい掲示、子どもの読書意欲をかき立

てる工夫ある掲示が、学校司書と司書教諭、ボランティアの手で進められている。

IV 成果と課題

1 成果

(1) ネットワークシステムの構築について・・・必要な本をすぐに豊富に入手できるようになった (資料16)

ア 町立図書館から学校への団体貸し出しのシステム（物流システム）が整備され、実施されたことにより、町立図書館の学校への貸し出し数が増加した。特に図書館を活用した授業実践が始まると、大量の本が動いた。

イ 学校間相互貸借システムを実施するにあたり、蔵書点検を行ってテーマ別蔵書リストを作成したことにより、町内のどこの学校にどんな本があるのかが明確になり、活用がしやすくなった。それにとまって学校間の貸借数も増加した。

ウ ネットワークシステムを創り上げる中で、町立図書館と学校図書館の交流が進み、町立図書館の学校図書館への支援がより細やかになった。また、町立図書館を利用する子どもたちへも様々なサービスが実施されるようになった。

エ 「学校図書館の事務分掌」の作成により、学校司書の役割や司書教諭との連携の在り方が明確になり、図書館の運営や子どもへの指導が円滑に進められるようになった。

(2) 職員の研修について・・・教職員の図書館活用への意識が高められた (資料17)

ア 学校図書館連絡会議で司書教諭や学校司書が各校の実践の様子を報告したり方策を話し合ったりすることにより、町全体の研修の方向性が明確になり、研修が深められた。さらに、司書教諭が各校での伝達や働き掛けに努めたことにより、教職員の研修への意識が高められた。

イ 外部講師を招いた研修会を設定したことにより、学校図書館を活用した授業実践や読書指導の在り方が提示され、職員の実践への意欲が引き出された。

(3) ネットワークシステムを活用した授業について・・・図書館を活用した授業実践が深められた (資料18)

ア ネットワークシステムにより、必要な時に必要な本を大量に集めることができた。その結果、学習の効果が上がり、子どもたちの意欲や集中力も高められた。

イ 各校で図書館の全体計画を作成し、付けたい情報活用力を明確にして授業実践したことにより、子どもたちは調べ学習の方法を習得し、本を使って学習するスタイルが定着してきた。

ウ 授業研究の公開を重ねることにより、図書館を活用した授業への教職員の理解が深まり、意欲が高まってきた。

エ 授業実践においては、担任のサポート役として、学校司書と司書教諭の働きが大

きかった。ネットワークで本を集めることから子どもへの支援まで、担任を助けて幅広く活動した。

(4) 読書指導及び図書館運営の工夫について・・・子どもの読書活動が活性化した

(資料19)

ア 担任と司書教諭、学校司書が連携してオリエンテーションや利用指導を進めたことにより、子どもたちの読書意欲が高まり、本の貸し出し数が増加した。また、図書館へ足を運ぶ子どもが増えた。

イ ネットワークを活用して「お薦めの本」コーナーを図書室に設置したことにより、子どもたちは様々な領域の本に親しむことができた。

ウ 図書委員会新聞等をとおして、学校間の情報交換を進めたことにより、子どもの読書への関心が高まるとともに、図書委員会の活動が活性化した。

(5) ボランティアの活動の活性化について・・・ボランティアと教職員との協働意識が高められた (資料20)

ア ボランティアの読み聞かせにより、子どもたちの読書への関心が高まり、読書領域が広がった。また、教職員もボランティアの選書や読み聞かせの仕方など、参考になることが多かった。

イ 毎週の活動や研修会をとおして、ボランティアは選書の仕方や読み聞かせの表現方法などを学び、力量を高めることができた。

ウ 読み聞かせの回数を重ねることにより、ボランティアと子どもたち、そして教職員との交流が深められた。

2 課題

(1) 組織の継続・活性化

ア ネットワークシステムはやっと軌道に乗ったところである。文部科学省の指定期間が終わっても、学校図書館連絡会議や支援センター委員会の組織は残し、ネットワークの機能を高めていきたい。

イ ネットワーク事業をさらに高めていくためには、推進の担い手となる司書教諭と学校司書を支援する体制が必要である。各学校に応じた支援体制を構築するようにさらに働きかけていきたい。

(2) 授業実践の質と量の向上

ア ネットワークシステムや図書館を活用した授業は実践例が多いとは言えない。町内の多くの教員が取り組んで、授業の進め方のノウハウをつかみ、様々な授業パターンを開発していきたい。

イ 図書館を活用した授業を進めていくためには、授業者が司書教諭や学校司書と連携して指導をしていくことが必要である。ティームティーチング等、効果的な連携の仕方について研究を深めていきたい。

ウ 次年度は吉田町の教職員で組織する吉田町教育会との連携を図り、町内の交流授業研修の中にネットワークを活用した授業研究を位置付け、研修を深めていきたい。

(3) 施設、資料数、学校司書の勤務時間等の改善

ア 学校図書館を活用した授業が増えるにつれて、図書館が手狭になってきた。児童生徒数の多い学校では図書館の学習スペースが不足し、不便なことが多い。学校の実情に合わせて工夫し、学習スペースを確保していきたい。

イ 本の分担収集や学校間貸し出しをさらに迅速にし充実させるためには、他校の本が検索できるようなシステムが必要である。機器やシステムの整備を図りたい。

ウ 学校図書館を活用した授業数の増加に対応していくためには、さらに資料を充実することが必要である。予算の確保を願っている。

エ 学校司書の業務は、子どもたちの図書館の利用が高まるほど多忙になり、勤務時間を超過して働くことが多い。業務に応じた勤務時間の拡大を願っている。

オ 授業や読書活動のさらなる推進を図るためには司書教諭の働き掛けや支援が必要である。特に授業での支援の機会を増やすために、司書教諭の授業の持ち時間を調整していきたい。

(4) 地域への発信

ア ネットワーク事業を発展させていくためには、事業の意義を保護者や地域に広めていくことが大切である。学校説明会や学校便り等を活用し、研究の成果を伝えていきたい。

イ 図書館を活用した授業は今後、研究開発が期待される分野である。次年度も吉田町の授業実践を近隣の学校に公開し、図書館を活用することの意義や授業の方法を広めていきたい。

ウ ネットワーク事業を深めていくためには、様々な意見を聴いて、研修に取り入れていくことが必要である。各種研修会等での研究発表の依頼を積極的に受け、吉田町の研究の成果を広めるとともに、他地域の参会者の意見から改善点を見い出していきたい。

V おわりに

私たちは、このネットワーク推進事業に、町ぐるみで取り組んできた。本や人のネットワークをつくることをとおして、「地域の子どもは地域みんなで育てる」といった気運が高まってきたと思われる。ここで培われた「心のネットワーク」を今後も大切にしていきたい。

なお、研究実践を進めるにあたっては、静岡県学校図書館資源共有ネットワーク推進委員会において、多くの貴重なご意見やご助言をいただくことができた。県推進委員会の皆様に感謝申し上げますとともに、ご指導いただいたことを今後も生かしていきたいと考えている。